

『ひがし北海道の物流を考えるシンポジウム ～道東3圏域の連携強化による発展を目指して～』

釧路開発建設部 地域振興対策室

ひがし北海道3圏域（釧路・根室、十勝、オホーツク）は、広大な土地を有し、それぞれの土壌や気象の条件を生かして、地域ごとに特色のある農業や水産業が営まれています。これらの1次産品は、全国各地に様々な方法で移出されていますが、近年の燃料費高騰、トラック運転者の労働時間の厳格化、荷物の小口化等、陸上輸送は大きな転換点を迎えています。一方、道東自動車道白糠ICの開通や、釧路港における国際バルク戦略港湾プロジェクトの新規着工など物流ネットワーク整備も進んできています。

このため、釧路開発建設部、帯広開発建設部、網走開発建設部が共催して、物流の視点による地域経済の活性化について情報を発信するとともに、各界の有識者をパネリストとしてお迎えし、物流における東北北海道の広域連携戦略について議論するシンポジウムを開催しました。

はじめに主催者として、釧路開発建設部の数土部長から、3開発建設部では、平成23年度から『観光・物流・防災』をテーマに道東地域の連携・協力について勉強会を重ね、昨年3月には網走において、観光をテーマにシンポジウムを開催したことや、本シンポジウムが物流を通じた3圏域の連携強化と地域振興に役立つことを祈念して挨拶がありました。



釧路開発建設部 数土部長の開会挨拶と会場の様子

基調講演は、北海道大学公共政策大学院特任教授の小磯修二先生をお迎えし、『物流の視点から東北道東の活性化戦略を考える』と題しまして、ご講演をいただきました。講演の最初には道東3圏域連携の意義について、日本全体での経済政策の効果はかなりの手応えを感じたが、地域によって格差が生まれており、こ

の格差がある地方への政策展開が必要で、これまでは3つの圏域が個別に議論してきたことが、人口減少によって、道東地域全体で連携して進めていくべきことを見極めることの重要性を述べられました。今回のテーマである物流については、地域経済の発展という視点から考えると、経済活動はモノやサービスのやりとりだが、必ず生産と消費の間に距離という隔りがあり、この隔りを埋めるために物流の役割は大変重要な要素となっていること、人口減少によって消費投資の機会が減少して、需要も減少してしまうため、外から需要を取り込むために、地域の食品の付加価値を高めて販売し、観光客を呼び込む必要があり、物流機能の強化が経済活性化に大きく関わっているとお話がありました。

東北道における物流の現状については、「釧路港は国際バルク戦略港湾の指定は受けましたが、現実には苫小牧港への港湾貨物の集中は加速しており、航空貨物についても地方空港の機材が小型化されて、新千歳空港に集約されてきています。このため、3圏域がそれぞれ個別に道央圏との結びつきを強くしていますが、3圏域相互の経済的な繋がりは比較的弱い構造となっています。しかし、道央圏との距離がある東北道東地域は輸送コストの面で不利となっていて、トラック運転手の労務規定の厳格化により、長距離輸送ができなくなるなどの陸上輸送への支障が出てきています。また、北海道新幹線の「新函館北斗」開業によって、道東地域にも鉄道貨物輸送への大きな影響が出てきます。これらの現状から得られる懸念として、道東地域は食料の生産拠点でありながら、人口減少が進んでいて、その人口減少は産業の担い手不足や消費の縮小をもたらし、産業の停滞が生じ、さらなる人口減少をもたらすという負のスパイラルに陥ってしまう」とのことでした。

最後に東北道における物流戦略の構築へ向けて、3つの視点を整理されました。一つ目が、道東で発生する貨物を道東圏から道外へ直接移・輸出するために、道央から道東へ物流機能をシフトしていくこと。二つ目が、そのための高速交通ネットワークの整備とともに、貯蔵施設、物流センター、加工センター等の物流の平準化に寄与する取組が必要なこと。三つ目が、バツ

クアッパ拠点の構築として、民間を中心にBCPやBCMといったリスク分散のための取組について、道東地域でどう受け止めていくかという視点も重要とお話になりました。



北大公共政策大学院の小磯先生による基調講演

パネルディスカッションは、引き続き小磯先生がコーディネーターを務め、パネリストとして、十勝地区トラック協会会長の沢本輝之氏、オホーツク商工会議所協議会会長の永田正記氏、浜中町農業協同組合代表理事組合長の石橋榮紀氏、北海道開発局港湾空港部部長の川合紀章氏の5名が参加して『物流における東北海道の広域連携戦略』と題して討論されました。

最初にそれぞれの立場から、東北海道の物流の現状と課題についてお話をしてもらいました。

沢本会長からはトラック業界について、「今はボタン一つでモノもお金も送れるが、実際に手元まで届けるのは、運送業者にしかできないことで、確実に届けるためには、ドライバーの給料を確保して、トラックも荷物を傷めないために、サスペンションの良いものを導入するなど、荷主さんの理解を得て最低限度やっつけていける運賃をいただくために信頼関係を一番大事にしている」とのことでした。



十勝地区トラック協会の沢本会長

永田会長からは、「道東地域は食料生産供給基地に位置づけられながら、インフラが脆弱で、地域連携も希薄であると感じており、釧路・十勝・オホーツクの連携をどうやって取っていくか非常に重要な問題です。また、4年前にタマネギ列車の存続について問題になりましたが、自身もJR貨物に要望に行き、何とか継続することで決着しましたが、列車の輸送能力には限界があり、トラックによる輸送も行われて、他にも水産物の輸送や電子部品メーカーの部品材料の輸送などもトラックを利用していることから、高規格道路の整備は大きな効果が期待できる」とのことでした。



オホーツク商工会議所協議会の永田会長

次に石橋組合長からは、「釧根地域は酪農が盛んですが、ここ3～4年は酪農家や乳牛の数、生乳生産量が減って基盤が弱体化していることが地域の最大の課題です。また、釧路・根室間の幹線道路は国道44号一本だけで、この道路を産業・生活・観光道路として使っているのは大変厳しく、凍結路面で運転が不慣れな人が時速30kmで走っていると、後ろを走る車全てに遅れが出て、大きな損失になります。このため、基幹となる道路網をしっかりと整備しないと地域の物流が滞ってしまう可能性があります」とのことでした。

最後に川合部長からは、「道東地域では生乳を除く農産品のかかなりの量を、苫小牧港湾や新千歳空港までトラック輸送してから移出されていて、トラックを長距離走らせることからコスト高になっています。しかし、道東は貨物が出来秋に集中していて通年で見ると航路を維持するだけの需要が無いので、航路の新設や航空機の大型化をすることができない状況になっています。また、トラック運転手の労務規定の厳格化により長距離運転が厳しくなり、このままでは、空路、陸路、海路のどれも道東から農産品を運べなくなってしまう恐れがある」とのことでした。



北海道開発局港湾空港部の川合部長

次に、小磯先生から各パネリストへ道東の厳しい状況を踏まえて、今後どのような方向で進むべきかについて、意見を伺いました。

川合部長は、「道東の農産物の輸送は出来秋に集中しすぎているため、東京・大阪で買い叩かれてしまっています。新たな流通型食料備蓄倉庫をつくり保管することで、出荷調整して高い価格で売ることや、水産物についても冷凍技術の進歩によって保存することが可能となっています。輸送量の平準化をすることで、フェリーの航路、大型航空路の運営の可能性が出てくるため、3圏域が連携して一定の輸送量を集めるために、道東のネットワークづくりが必要」とのことでした。

石橋組合長は、「道東における農水産物の加工技術を上げることも必要で、釧路では窒素水にて生鮮のまま発送する技術も出てきています。共同輸送についても顧客の情報等企業秘密もあることから、東京の配送拠点までを共同で運ぶシステムを考えるべき」とのことでした。



浜中町農業共同組合の石橋組合長

永田会長は、「オホーツクにある6つの商工会議所の包括連携をしようと動いていて、お互いの良いところを生かして効果が上がるような仕組み作りを考えており、これは、物流の話でも同様で、道東が酪農、漁業、農業で結束すれば、量を確保できる可能性が十分にある」とのことでした。

沢本会長は、「釧路から本州に農産品を運ぶ時に、釧路港では船の出航時間が合わないため、苫小牧港まで運ぶこともあります。この時は日勝峠を通過して長距離を走るようになるため、商品が傷むこともあります。せめて釧路港からもう1、2便貨物船が増えてほしいと思う」とのことでした。

さらに3圏域が連携して取り組んでいくために、大切なことは何かを伺いました。パネリストからは、「出来秋に出荷した後の帰り荷として、生活物資など道東向けに集められるよう連携をすることが必要です」「環境問題を考えると、トラックから鉄道や海運に切り替えるモーダルシフトを国全体で考える必要があります。」「オホーツクには紋別もあり、ここは鉄道が無く医者も足りない、三次医療が可能な北見市内に救急の一つの目安である1時間以内に行けるように、高速道路をしっかりと整備してほしい」「農業や運送業は、国を支えていく大切な産業であるため、誇りを持って職業に就くためにも、きちんと評価をしてほしい」など、色々な意見が出されました。

最後に小磯先生からは、「札幌一極集中の中で、他の地域がどう連携していくのかが北海道にとっても大きなテーマとなります。それぞれの地域の持ち味を生かし、競争しながら、本日のような場で問題・課題を提起しつつ共有していくことで、具体策が出てくると思います。このシンポジウムが開発建設部の連携によるものだけでは無く、色々な展開のきっかけになればと思います」と述べられて、シンポジウムが終了しました。

